

矢田監物のいた村

小山田の歴史

まえがき

幼い頃より矢田監物に關心をいただき、また万松寺（ばんしょうじ）の存在に疑問を感じてきた。

史料の収集から約二十余年の歳月が流れたが、それらの資料を考察していく中で小山田の歴史を垣間見る事となった。今を期に小山田の歴史を日本国という大きな流れの中であらためてみようと思い、この小山田の歴史年表を作成するに至った。

史実は古代から中世、近世が中心である。ことばの理解、場所の特定に困難を要したが、各方面から資料を御提供いただき、また山田の多くの方々にも御協力をいただいた。特に永年小山田の役場に勤務され土地開発、開墾、登記の公益事業にたずさわられた伊藤人心氏からは貴重な情報をいただいて何とか完成することができた。心から感謝を申し上げる次第である。まだまだ私の知らぬことがたくさんあると思うが、この資料をタタキ台として積み上げていただければ幸いである。

考察の中で新たに理解できたこと

一、中世から以降吉田郷（注1）が山田村となり、どのようにして発展してきたかが、「加富大明神記」（注4）を通してありありと読み取れることである。旧垣内（ふるかいと）を中心に鎌谷川ぞいに住居をなした村民が、田畑の開墾と人口の増加にともない北の山側に移り住み「村」の形態をなしてきた。

日本の国づくりという大きな歴史（注5）の変化の中で弓箭（戦争および略奪）の難に耐え年貢に苦しみながらも村を守りつくりあげてきた先達の歴史には頭の下がる思いがする。

二、また、中世において村民が、信仰を求め御堂を守り祭礼をあげてやすらぎを求めてきた。鎌倉時代から江戸時代末期の日本における宗教は、日本古来の神道の中に佛教が入り込み神仏混淆（注2）の時代であった。当小山田村においても、神殿の中に佛像を安置し、神主が仏像を崇め祀っていた様子がまざまざとうかがえる。

また特記すべきことは、一五六八年織田信長の北勢攻め以前においては、現在の加富神社から南に向けて「佃」「釈迦垣内」「釈迦堂」「加富の森」まで、北は「宮蔵田」（宮蔵畑）「神田がそわ」（神田添）までの一帯が神領（神社に付属する土地）であったが、信長の家臣滝川一益が当村に攻め入りことごとく没収され、織田信長の所領となった。その時期小山田の神主の秦氏は現在の波木町に移り住み波木の加富神社の神主となった。その後、小山田の加富神領はことごとく田畑として開墾されていった。何代後か不明ではあるが波木町神主の秦信安の時代、秦信安の嫡子秦忠安が小山田に帰り、その秦忠安の子が波木町に残った。

三、矢田監物（注3）が小山田村にどのようないきさつで、どのようにして迎え入れられたかが理解できたことである。また万松寺が矢田監物の手によって建立され、十一面観音像、そして地藏像が安置されたこと。そ

の仏像が様々の因縁のもとにめぐりめぐって現在安性寺の観音堂に安置されていることが判明したときには身震いすら感じたことである。

五、最大の疑問点でもあった名字（姓）についてであるが、私たちの受けた教育から判断すると江戸時代の農民は名字（姓）を語るべからずと思われてきた。しかし実際は江戸時代からすでに村内においては用いられていたということである。（注6）

六、また私の驚いたことは、古代におけるこの地域の人達から現代の人達までの生活の営みが、連綿としてつながり息づいていることである。また物や場所の名称が、文字としてではなく「音（おん）」として語り継がれていることである。たとえば弊籤谷（へいくじだに）のことを現在の人は「ヘクチダニ」または「ヘチクダニ」と発音する。また堂ヶ山旧跡の陰涼寺（おんりょうじ）が遠生寺となり、かつては「おんじょうじ」と発音されていたものと推測する。それが現在の遠生寺（えんじょうじ）となってきたことは明白だと思ふ。

これらの事に気付いたとき二千年の歴史がそれほど遠くないように思われた。これからも、延々と人々の生活の営みが続いていくだろうが、平和な未来であることを願ってやまない。

歴史的考察

(注1) 小山田の地名の変遷

往古、現在の足見川の流域の名称を葦見田（あしみた）と言った。

大化の改新（六四五）で国・郡・里制が設けられた。

天平一二年（七四〇）里を廃止、郷制となった。

聖武天皇の御代、国、郡、里、村、河名等は、二字で表せという制令（好字二字令）が出されたので、葦見田を葦田と改めることになった。それにつれて、葦田郷（あしだ郷）から「音」を転じて吉田郷（よしだ郷）と書くに至った。（順和名類聚抄）

七四〇年頃、莊園（奈良時代から室町時代にかけて全国にみられた貴族や社寺の私有地）が起こり神領が拡大した。

この頃から「字名」はできてきたと思うが、時代によりその名称は変化してきたと思われる。

九六二年の外宮神領目録によると、吉田郷は采女郷の六名郷に属し小山田御厨（伊勢神宮所領地）として小山田の名称が現れる。

室町時代（一四四〇頃）土豪勢力が拡大した。矢田監物山田城を築く（一五五一）。一五九〇年滅亡。

江戸時代（一六〇〇）においては山田村と呼ばれ、菰野藩（藩主土方雄久）に属した。

明治二年（一八六九）七月十六日土方雄永（十二代菰野藩主）が藩籍を奉還した。

明治四年（一八七二）七月十四日廢藩置県により当村は三重縣下第壹大区四之小区山田村となった。

明治二十二年（一八八九）小山・山田・六名・堂ヶ山の四か村を合併し三重郡小山田村となった。

昭和二十九年（一九五四）山田は四日市市に編入され、四日市市山田町となった。

（注2）神仏混淆（本地垂迹）

仏教伝来の当初から多信仰的性格を持った神道は、先進国の文明を自然にむしろ積極的に受け入れてきた。

聖徳太子

「篤く三宝を敬え。三宝とは仏・法・僧なり」

各地に神宮寺建立。

神は仏法を守る存在。

神は菩薩以下（人間的存在）

平安初期には神にも菩薩号を付け始める。

平安時代中期

神ごんげんⅡ権現（神は仏や菩薩が姿を変えて現れたものである）これを本地垂迹ほんちすいじやくともいう。

平安中期から鎌倉時代

本地垂迹ほんちすいじやく説が本格化する。

阿弥陀如来あみだにょらい⇓八幡大菩薩はちまんたいはさつ

大日如来だいにちにょらい⇓伊勢大神宮いせだいじんぐう

平清盛が法華経ほけきょうを嚴島神社いつくしまに奉納する等。

南北朝時代

反本地垂迹はんほんちすいじやく説（神を本とする）「神本佛迹しんほんぶつじやく」出始める。

江戸時代

神道しんどう、儒教じゆきやうが佛教ぶつぎやうを排斥はいせきする動きが始まる。

明治時代

神仏分離令しんぶつぶんりれい

排仏毀釈はいぶつしやく

(注3) 矢田監物と万松寺十一面観音像について

一五五〇年室町時代十二代將軍足利義晴は近江の地で亡くなり、葬儀は京都の常御所御座所で執り行われた。推測ではあるが、重臣の家来であった矢田監物は常に將軍義晴と行動を共にし、臨終の際も立合い、葬儀にも参列していたものと思う。

その頃日本国内では戦国武將が入り乱れて勢力争いの合戦が行われている最中で、主君を失った監物は家族と家臣を引きつれ定住の地を探し求めてさまよっていたのであろう。

一方小山田村においては村の大半が加富神社小山田御厨として伊勢神宮の神領であった当時である。「加富大明神記」によると小山田においても他地域の領主から略奪強奪が相次ぎ、神社に供える稲穂までが略奪されていたという状況が記されている。

渡りに船と言うことであろうが、定住の地を求めていた矢田監物が小山田の地に現れたとき、小山田の村民はこの地を守って欲しいと監物に懇願したことは事実であろう。

監物は七千石の武士であったとの記述もあることから、立派な武具を身に付け威厳をはなっていたと考えられる。家族と郎党を引きつれ約二十〜三十名程の集団であったと想像する。実子である兄喜太郎、弟小太郎、監物

の妻も同伴であつたことは推測できる。喜太郎、小太郎はまだ幼名であることからして十歳前後かと思う。当時の結婚は十六歳頃であらうから監物とその妻は三十歳前後であらうか。

小山田の地に落ち着こうと決心した監物は殿垣内（とのかいと）と称する田畑を加富神社から与えられ押領使として山田城を築くに至るのである。

到着の翌年には齋山に八幡宮を造立し、中尾山橋西付近に主君足利義晴の菩提を弔うための長谷山万松寺を造立し、十一面観音像を本尊にしてその脇には地藏佛を祀つたものと思われる。一気にこのような建造物と仏像を祀り上げる所から察すると、財政的にはかなり裕福な状況であつたと思う。

監物来村の時、同行した家来で、その片腕であつただらうと考えられる平尾某は、後の時代に監物の本尊である十一面観音像を浦山八幡山の北にあたる観音谷に堂を建て守り通した人物であると思われる。

監物が小田原攻めに出陣するまでには約三十年の年月が経過している。当時監物は六十歳前後であつたと推測する。監物が出陣の折、平尾某は年老いていたのかまたは村内および家族を死守する役目を仰せつかったのであるのか、事實は判らないが小山田の地に残つたのである。そして帰らぬ主君監物を待ち続けたのだと思う。

監物の死後数十年が経ち主君が帰らぬ人であることを知り、彼は平尾家の自庵である観音谷のふもとにお堂（観音堂）を建て御本尊（十一面観音像）および地藏像を移し弔つたのであらう。

そして監物死後約九十年程経ち、平尾家の子孫に当たる平尾四郎兵衛政国は観音堂のかたわらに「万松院尊儀」と刻んだ石碑（注1）を建てたのである。そしてその石碑は現在安性寺裏山の墓地に移されている。「万松院殿尊儀」とは足利義晴の法名であるが、平尾四郎兵衛政国は、先祖平尾某の主君足利義晴および矢田監物への忠義の想いを忘れまじとその石碑を建立したものであろう。

十一面観音像はその後平尾丈右衛門当代に家系断絶により（一七三八年）矢田六郎右衛門（注2）の手に渡った。そして六郎右衛門は三十七年間自家に安置した後村内法源寺に十一面観音像を寄進したのである。しかし一八五四年安政の大地震により法源寺本堂および観音堂は大破するのであるが、篤信者の手により仏像類は持ち出され、その五年後（一八五八年）に法源寺は修造され観音像および如来像は無事安置されたのである。しかし明治時代に入り一八七三年排仏毀釈によって法源寺は廃寺となった。その間十五年である。その時如来像は暁覚寺へ観音像は安性寺に移され保存会の手によって守られ、今なおその霊験あらたかなるお姿を顕しているのである。

（注1）石碑背面には施主・元禄四天末七月上旬 願誉政極 当村、平尾多兵衛の父（平尾四郎兵衛政国）宝永四年十一月二十日亡と刻まれている。平尾多兵衛の名は安性寺過去帳にも記載されている。

（注2）矢田六郎右衛門の名も安性寺過去帳に見られる。

十一面観音像の経路



(注4) 加富大明神記について

「加富大明神記」の初版は加富神社が伊勢神宮の延喜式内社(注1)の公式神社として列記されたときすなわち九二七年頃に書かれたものであろう。

冒頭の部分に「神森(こうもり)」の中に涸れることのない泉があり、まずそこに榊を建て御堂を建てて「加富大明神」としたとの由来が書かれている。神社の往古を語るものとしては貴重な一文ではあるが、「加富(かふ)神社」としての正式名称はやはり伊勢神宮の延喜式神名帳に記載(九二七年)されてから以降の名称であろう。したがって神森(こうもり)の中に榊を建て堂を建てたということは「神森(こうもり)のお社」程度に考えるほうが自然であると思う。すなわちその時代は神道、密教の入り乱れていた時代であり純粹に現在の神社と言えるかどうかは疑問である。

そして大明神記はその後、年代を経るごとに書き写され、またそれ以降の事が書き加えられたのだろう。書き替えた年代および回数は定かではないが最低二回は書き加えて末代に伝えられたと考える。そのため記述の中で歴史年代がはつきりと記されていない部分が後代において年代の前後を交錯しながら書き加えられているものだと思う。また「古老の話によると・・・」と言う語部の口碑部分が断片的で、なおかつ年代的に正確な記憶で語

り継がれたものとは考えにくく、なお一層難解な文章となっている。しかし整理をしながら読んでいくと古代、中世の村内における転変の様子をこれほど如実に表現している文書は他には見当たらない。

大明神記には「神森」の横に「かふもり」とフリガナがついている。当時の発音は「カフモリ」に近い発音であつたと思う。たとえば蝶々（ちようちよう）のことを平安期には「てふてふ」と記し、発音もそれに近いものであつた。それを考えると「神森（かふもり）神社」の音（おん）をあてはめ加富神社（かふじんじや）となつてきたことは充分に考えられる。なお、竹内弘記「小山田歴史読本稿本」によると明和六年（1769）に加富大明神記一卷および吉田郷内諸神社一卷を作るとあるが、これが現存の明神記の最終稿であろう。

（注1）平安時代の律・令・格の施行細則を集成した法典で、醍醐天皇により延喜五年（905）八月に編纂を開始、二十二年後の延長五年（927）十二月に完成した。

五十巻三千数百条の条文は、律令官制の任官の役所ごとに配分・配列され、巻一から巻十が神祇官関係である。延喜式巻一から巻十のうち、巻九・十は神名帳であり、当時の官社の一覧表で、祈年祭奉幣にあずかる神社二千八百六十一社（天神地祇三千百三十二座）を国郡別に羅列している。ここに記載された神社が、いわゆる「式内社」である。つまり、式内社は、平安時代（10世紀）にすでに由緒ある神社として知られていたことになる。

なお延喜式帳に小山田御厨が現れるのは応和二年（962）とある。

(注5) 日本国の成立と小山田の変遷

紀元前一万年〜三万年を旧石器時代という。四日市市の史跡調査によると中尾山遺跡から旧石器が発掘されており、それらを判断材料とすれば紀元前一万年前には小山田の地域に人は住んでいたことになる。向山、大玄、大坪遺跡からは縄文時代、弥生時代の遺跡が発掘されている。また和田ヶ平遺跡からは古墳時代(三〇〇〜六〇〇年)の横穴式石室が発見されていることから推測すると、集団化した人々が住んでいたことになる。

大化の改新(645年)と同時に日本国家としての成立と組織造りが始まった。班田収受の法(652年)により戸籍がつくられ納税の義務が制定された。奈良時代(710年〜)(2図参照)に入ると三世一身法(723年)により私有地の所有が認められ、ますます開墾の奨励がすすめられた。それに引き続き墾田永代私有法(743年)によってなおいつそう墾田開発に拍車がかかった。しかしこれらの国づくり政策の結果、地方の貴族や神社が勢力を持ち一括所有を始め、絶大なる勢力を有するようになった。すなわち莊園(貴族の所有地)神領(神社の所有地)(3図参照)の拡大化現象が起こるのである。

その中でも藤原氏が絶大なる権力を有し平安時代(794年〜)という貴族国家が成立することとなった。各地に国司をおいて国家の統制をし貴族主導型社会を保とうとするが、日本国内の各地に土豪武士が領地を拡大し、徐々に力を増するようになり、源頼朝による鎌倉時代(1192〜)という武士主導型の国家が出来上がるので

ある。

その後足利尊氏が台頭し室町時代（1400年）が到来する。しかし1500年代になると地方武士達が領地を奪いあい群雄割拠する戦国時代（1500年）（4図参照）に突入するのである。大小合わせて数千人の武将達と、数百もの国取り合戦が行われ、最後に勝ち残ったのが徳川家康で徳川幕府の江戸時代（一六〇〇年）

〔5図参照〕三百年の礎を築くのである。

一八六八年に徳川幕府は滅び明治時代となった。開国日本の始まりである。しかし開国は同時に諸外国との軋轢を生じ、国家対国家という国際間の戦争に発展していったのである。

図 1

古墳時代 (0~500年) 頃

加富神社の旧記(古い記録)によれば、昔はこの土地を「吉田の原」(よしたのはら)と称した。その頃、この郷の頭(ほとり=先端、或いは目立つ所)に、自然の森があり「神森」(かふもり)と呼ぶ。自生の松や杉が一面に生い茂り、老樹・古木が枝をつらねていたが、樵(きこり)が斧鉄(ふえつ=おのとまさかり)を振うこともなく、また、繁茂する草むらを牛馬が秣場(まぐさば)とすることもなかった。このため草むらは樹木の根を培い、木々の枝葉はいよいよ成長した。聞くところによれば、この森は「霊場」であると言う。

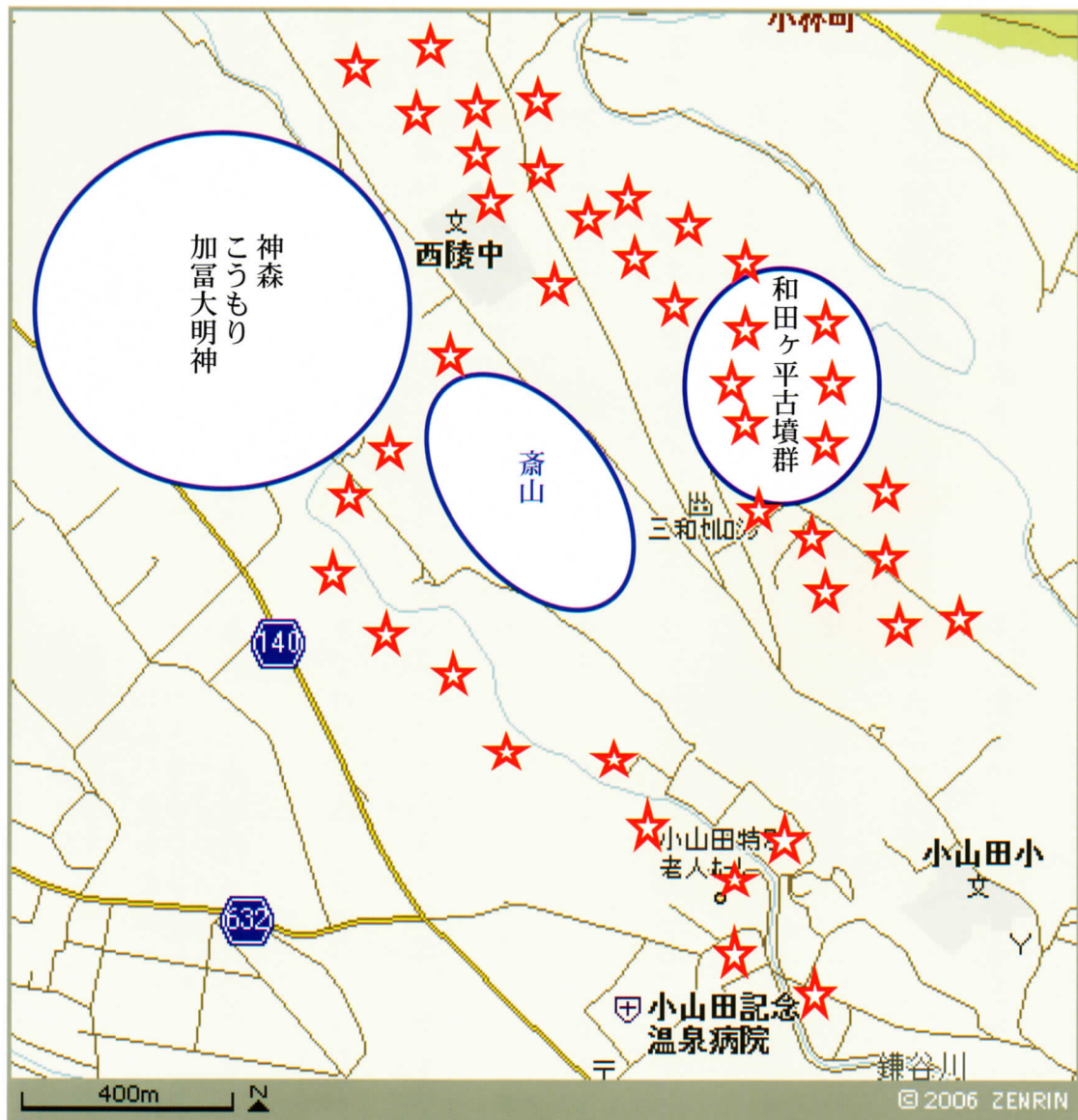
古老の伝えて言うには、その森の茂みは六、七町四方をこえる広さで、

しかもその境界は限られていない。今また計ってみると十町以上ある。

ここに一入の人物が登場する。〔神主・秦(はた)氏の先祖である。氏の家系は不明〕この人は、森の東の辺りで、この世に姿を現された神に出逢った。赤白黄光(しゃくびやくおうこう)の宝珠(ほうしゅ=宝の玉)を捧げ持ち、どっしりとした大きな岩の上に座しておられる。お姿は尊く、お顔立ちから服装まで常人とはまるで違う。伏して恭(うやうや)しく礼拝した。その神は、『我は「かふ森」に住む。神名(かみな)は神素戔嗚(かふすさのう)とお告げになられた。、直ちにその森の真ん中にお宮を建て、これをお祀りして、『加富(かふ)大明神』と称号した。その森の中には、自然に清水の湧き出す泉がある。その神は、『神霊ここにとどまり、万民に永久不変の利益(りやく)を授けること、雨の時も旱(ひでり)の時もこの泉が常に増減なく湧き出ること例え知るべし』とご託宣(ごたくせん、神のお告げ)になられた。(澤野修甫氏訳 加富大明神記)より

注

★は分布状況であり、戸数とは関係はない。



500年頃「吉田郷」の領域想定図

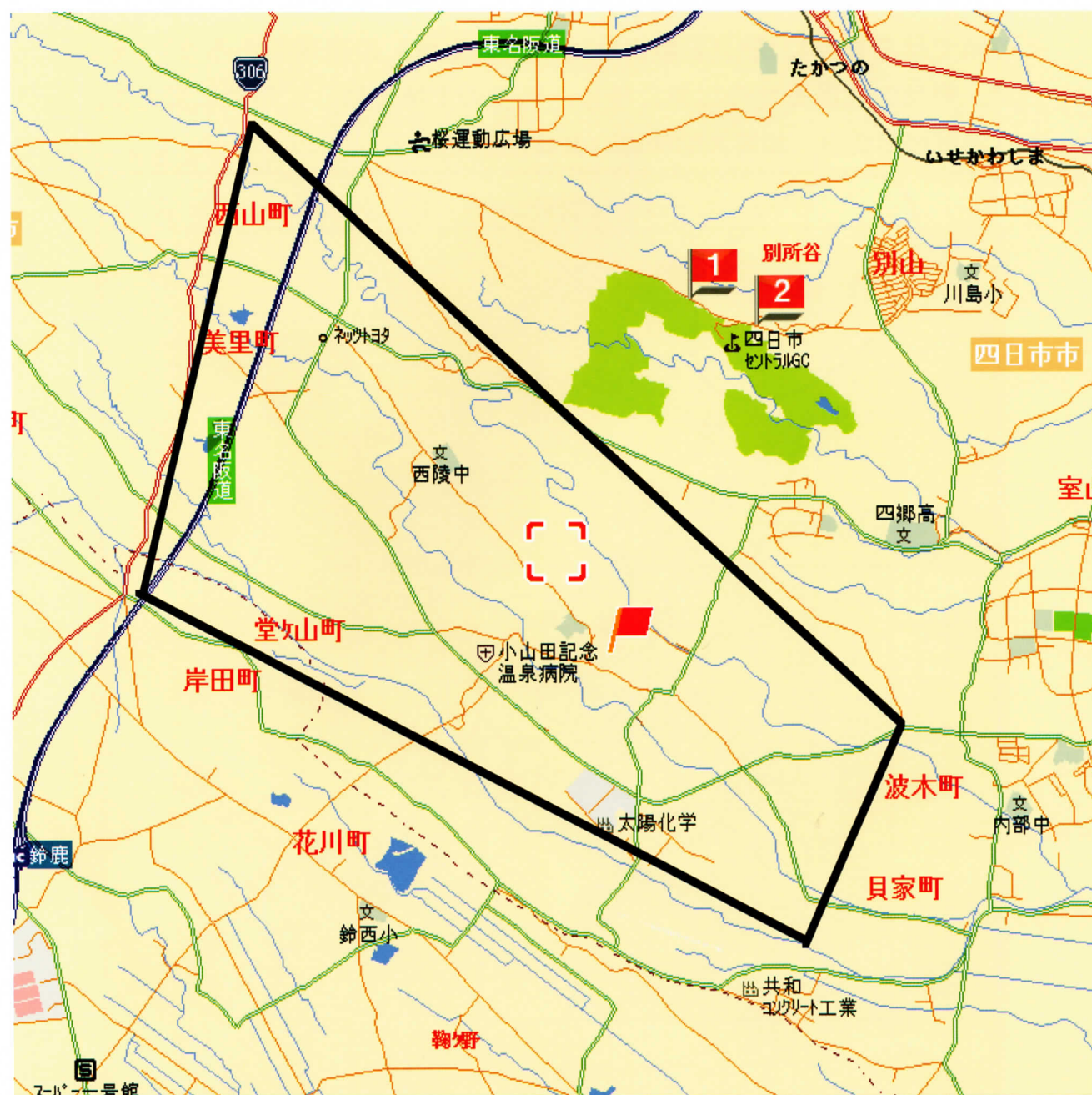


図2

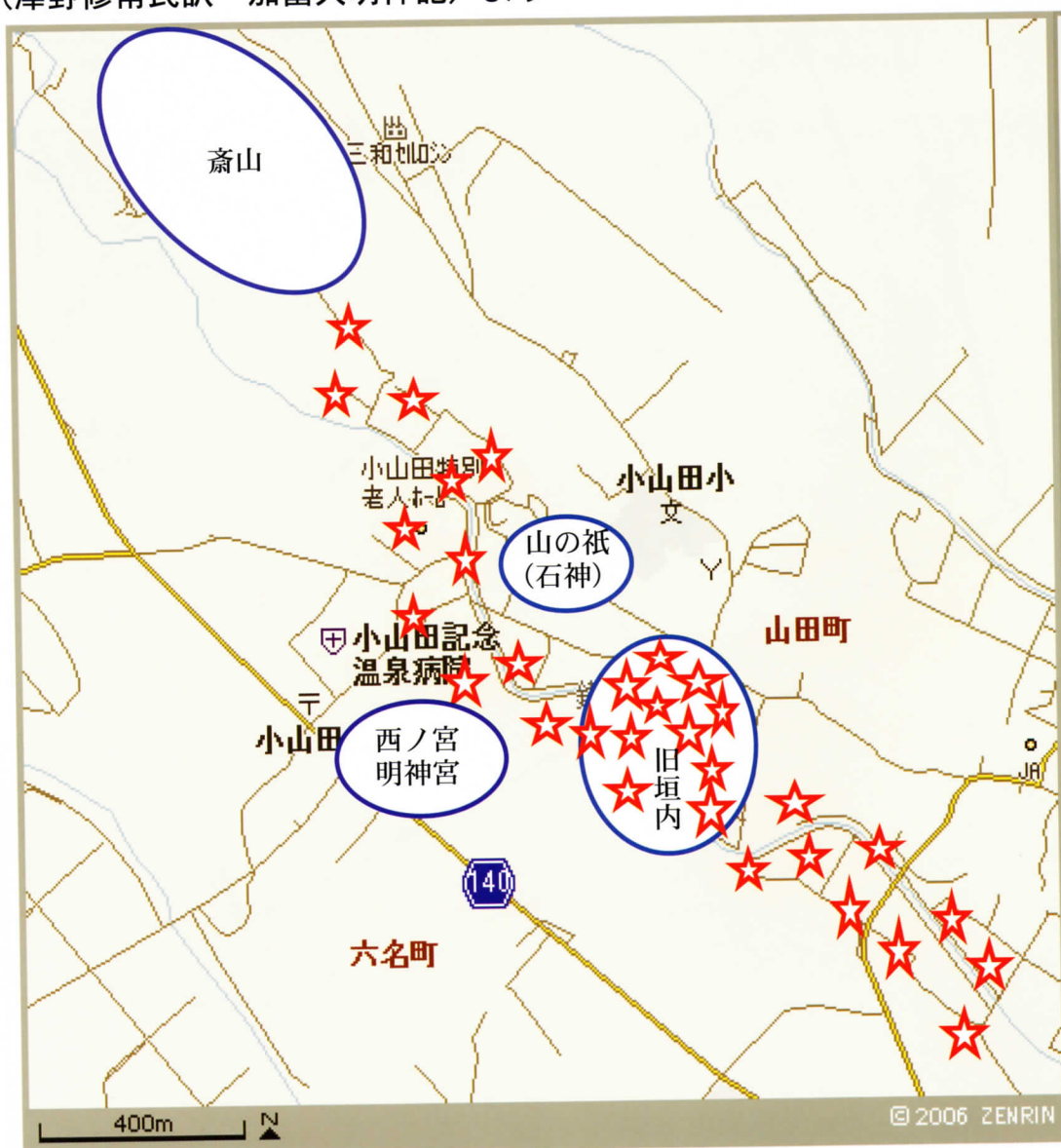
飛鳥～奈良～平安時代（500～1000年頃）

奈良時代の郡郷制において「吉田郷」と呼ばれていた時代である。（著者添書き）

そのむかし郷民が初めて住居を構えた場所は旧垣内（ふるかいと）と呼ばれる字（あざな）の田地である。

数百の歳霜（せいそう）を送って（数百年を経て）、郷民の数は増え、家の数も年と共に多くなった。従来の耕地では、老人子供の養いにも窮（きゅう）する。しかし、暮らしを助けるために桑を植えようにも、五畝（ごほ）の地ではあまりに狭い（五畝の地は「狭い土地」の表現であろう）。そこで、郷民の住居を北の山原に移し、旧宅の土地を耕して田地に変えた。

（澤野修甫氏 加富大明神記）より



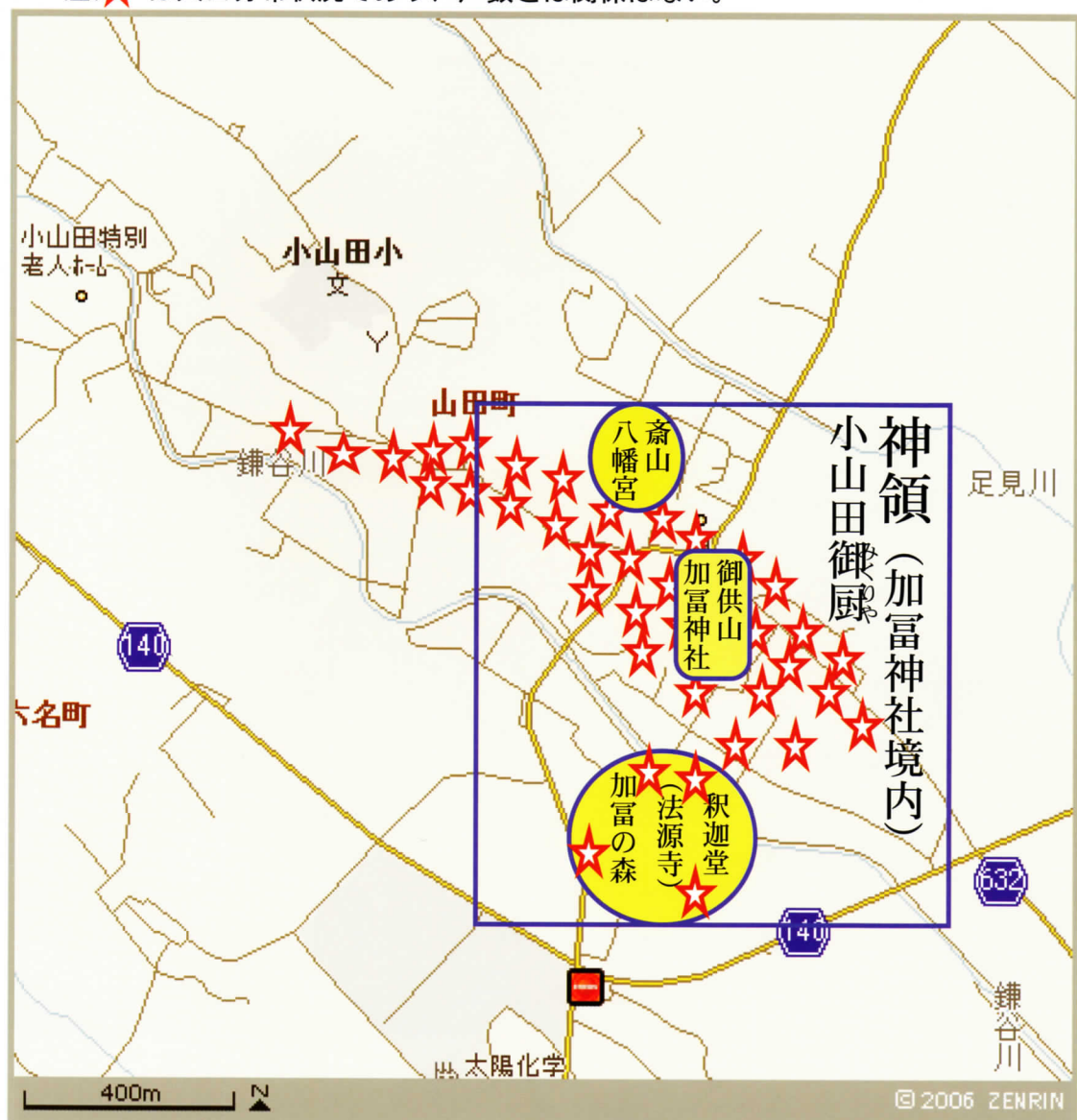
注★ は人口分布状況であり、戸数とは関係はない。

鎌倉～室町時代（1000年～1500年）

加富神社も神供山(みそのやま)の西の小山にご遷座(せんざ)した。その場所を選んだのは、そこが我が神の最初にお姿を現された垂迹(すいじゃく)の地であった為でもある。即ち、現在の社地がそれであり、境内の広さは方(ほう＝正方形の一辺)七町に余る。はじめて村名を改め加えて『吉田郷小山田村』(よしたのこうおやまだむら)と称号する。これは、民家を小山原(おやまはら)に移し、旧宅を田地に開いて郷民の産業を盛んにしたことによる。(澤野修甫氏訳 加富大明神記)より

「境内」（けいだい）とは庭という意味ではなく、所領地という意味であろう。
（著者添書き）

注、★ は人口分布状況であり、戸数とは関係はない。



(1466-1469) 文正・応仁(ぶんしょう・おうにん)の頃、日本国内で弓箭の難(きゅうせんなん)＝武士の争い、いくさ)が起こり、西北地域で大いに乱れた。兵戦は止むことなく、互いに他領を侵して境の土地を奪った。国司への貢物は支障し、神社の供料まで掠め取られて、郷民は大いに悩まされた。しかし、郷民にはこれを防ぐ手立てがない。その頃(1550)丹波の国の生まれで矢田監物某(やだけんもつなにがし)を名乗る勇士が、国の乱れを避けて当地へやってきた。郷民は大いに喜んでこの人物に従い仕え、間もなくこの郷の押領使(おうりょうし＝昔、兵を統率して盗賊などを討つ職。諸国に置かれた)になってもらう取り決めに交わした。

永禄(えいろく)十一年(1568)信長公の命で家臣の瀧川左近将親がこの地を領知し、当社の神供領はことごとく没収されてしまう。

これ以来、年貢米は年ごとに上げ増しされ、運用(やりくり)は月ごとに苛酷になった。暮らし向きの窮迫で平静を失った郷民は、もっぱら地頭や領主の咎(とが)めを逃れて、老人子供を飢えや寒さから守りたいと欲するばかり。このため互いに競い争って開墾に走り、用水の便のある処は旧跡や霊場に止どまらず、神殿を葺く茅の刈り場として田畑に開くことを禁じた「幣闘(へいくじ)の地」に至るまで、ことごとく新田にしてしまった。(澤野修甫氏訳 加富大明神記)より

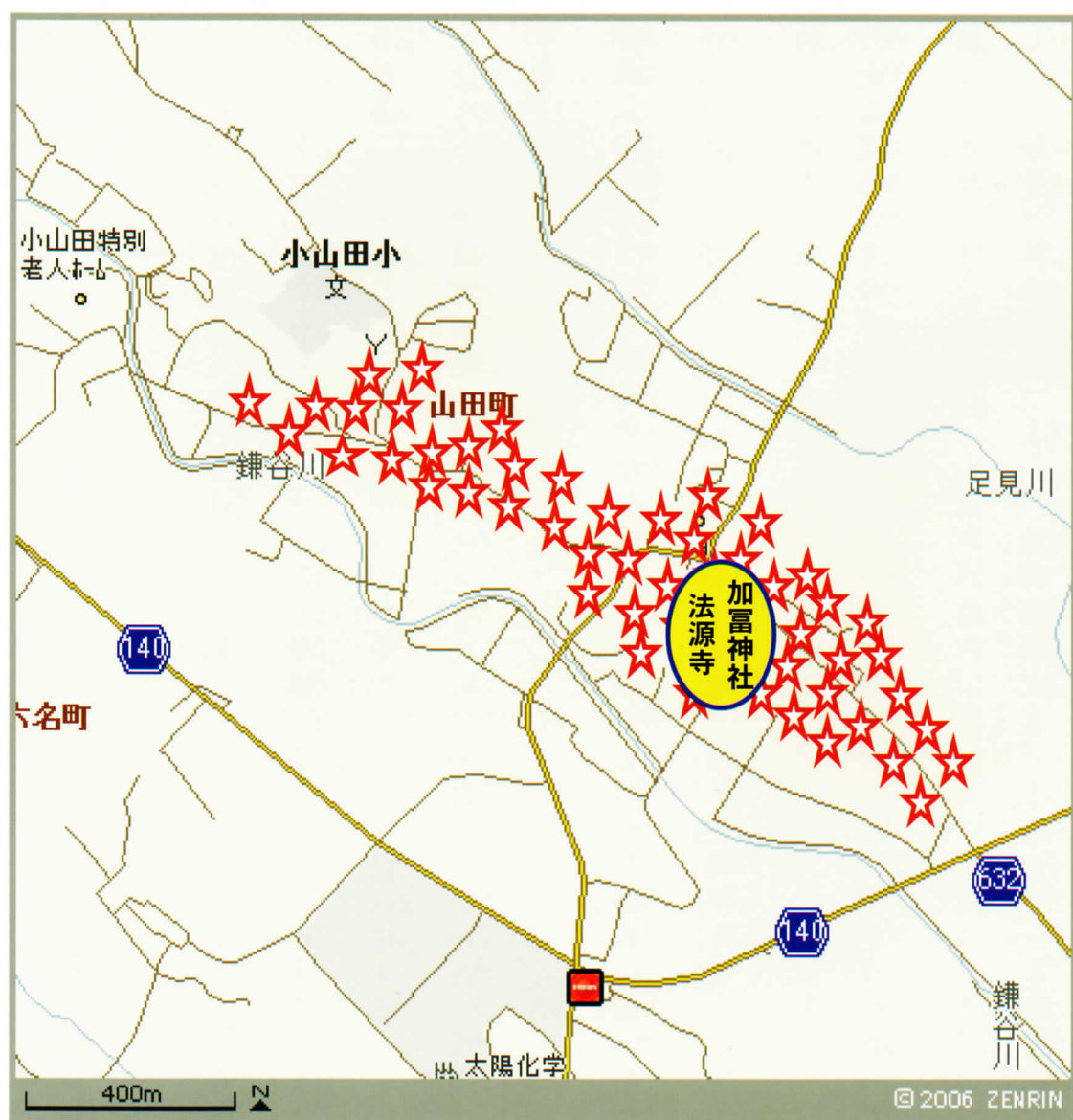
竹内弘記によると1688年2月山田法源寺 向山(堂山)より北方〔現在加富神社西南〕に移転すとある。



注、★ は人口分布状況であり、戸数とは関係はない。

慶長六年（1601）辛丑（かのとうし）の年に今の領主、土方河内守雄久侯（ひじかたかわちのかみかつひさこう）がこの地をご拝領になってからは、国も静まり民も安らぎ、ようやく平静が戻った。昔の造りに比べれば、百分の一にさえ満たないものではあったが、ここに本社を営み、拝殿を造り鳥居を建て、無窮（むきゅう＝かぎりない）の康栄（こうえい＝ゆるぎない繁栄の意）を祈る。時は慶長十一年（1606）丙午（ひのえのうま）、十月十三日に遷宮の儀式を執り行った。
（澤野修甫氏訳 加富大明神記）より

注、★ は人口分布状況であり、戸数とは関係はない。



枝郷西山村について

西山村という村落ができるのは、江戸時代延宝二年（1674）に京都の人、平野清左衛門が池を掘り開墾した平野新田に始まる。しかし現在のミルクロードから東方和田ヶ平の一带は、小山田村が出来る以前（0～50年）から集落があった。すなわち神森（かふもり）に加富大明神の社を祀っていた時代である。しかし大化の改新（645年）以降の開墾政策により、人々は河川地帯での稲作地を求めて離散していった。残ったのは神道および密教の行者の集う地としてであったと思う。

小山田村の発祥の地とも言える神森（かふもり）と不動の滝が今なお存在するのは行者達の信仰および修行の場所として存続されてきた所以であると思う。不動の滝では今なお修行者が集い、西山町においては「不動祭」がおこなわれると聞く。

東名阪高速道路、ミルクロードの走る現在、その中に見る「不動の滝」近辺は原始風景を今なお残している希有な場所であると思う。

なお西山に関しては参考文献として「加富神社古文書」より「枝郷西山立ち始まりの記」を参考にしていただきたい。

「枝郷西山立ち始まりの記」

竹内大真 訳「加富神社古文書」より

そもそもかつて当村（西山村）の立ち始まりの由来は、字（あぎ）水飲谷（みずのみだに）と申す所へ、その姓（せい）伊藤一族の四、五戸農業に出百姓いたし住居し、小山田村役人に随心（つきしたがう）いたしところ、間もなく京都の産（うまれ）平野清左衛門（ひらのせいざえもん）と申す者、ろうろうとして来たりぬ。ただちに平野、産土（うぶすな）の神、八所御霊神（はっしよごりようじん）を日頃より崇敬（すうけい）うやまうこと）に付き、この年延宝二（1674年）甲寅（きのえとら）二月一六日をもって祭日となし勧請（かんじょう）神仏の来臨（らいりん）や神託（しんたく）を請い願うこと）たてまつる。その枝郷（わかれた土地）を西山と称し、その新田を「平野新田」と称す。

その御霊の神の社地は字（あぎ）宮の前と申す所に祀（まつ）り、その新田は宮の前東にある田地これなり。その後、字（あぎ）内戸谷（うちとや）と小山ヶ崎（おやまがさき）ニヶ所に池を掘り、巖嶋社（いつくしましや）を祀（まつ）る。ところの第一、火の用心、次に田所の用水にいたすところなり。この祭神も延宝年中（1673）1680）の勧請（かんじょう）なり。その上の年限より当明治四〇年まで、実際二三五年間立つなり。

その氏神（うじがみ）またはニヶ所池の神、神主（かみぬし）時代は秦氏（はたし）の上古（じようこ）おおむかしより五世後、秦清大夫安廣（はたせいだゆうやすひろ）なり。この安廣より当職（現職の）秦勇教安（はたいさむ

のりやす) まで八代前なり。実にこの年代調書は、はばかりながら前代未聞の事なり。

この地所、高野(たかの)なれども農業のためにと二ヶ所も池を開墾し、次に古来(むかし)より新田のところゆえ御上(おかみ幕府)、租税上も少しは立て安きはずなり。ゆえに他方より「入り百姓」に「寄せ留人」あまたありて、もはや村内、今にも百戸におよぶ心組(こころぐみ)心構え)なれば、村吏員中(村役人)はもちろん他村まで賞美(ほめたたえる)いたすところなり。

三重県下三重郡小山田村大字山田加富神社社掌

その時明治四十年統合昆宿十月?望 秦勇教安 押印

大字山田の枝郷西山

伊藤平吉殿 閣下

村吏員中

(注6)

士農工商の身分制度について（清水慶一氏の「ごさんべえのページ」より許諾掲載）

歴史教科書には、江戸時代には武士だけが姓を名乗ることを許され、一般の人々は公には姓を名乗ることが出来なかったと書いてあります。しかし、多くの家では戦国時代に使っていた姓をだいにしていたようです。

寺の過去帳や戸籍台帳、また公文書の署名には姓は記されていませんが、村内の取り決め文書、墓碑や位牌には、きちんと姓が入っています。

田舎に行くと同じ姓の集落が至る所にあります。これは、明治の戸籍編製時に一括して同じ姓をつけたのではなくて、その起源は江戸時代より前の歴史にさかのぼります。

また、士農工商という身分制度があつて、異なる身分の間の通婚は禁じられていたとも云いますが、これも実際にそんなことが徹底できたはずはありません。

身分制度を作った目的は、武士とそれ以外の人を明確に分けて治安を維持しようとしたもので（兵農分離）、士農工商は徳川家のオリジナルではなく、秀吉が「刀狩り」を行つたのに始まります。

ですから、職種で人を差別しようという制度ではなく、そのような解釈は後世の（明治以降の）教育から生まれたものと思います。

現代でも、別々の職業について二人の兄弟の子孫はお互いに親族関係を続けるように、江戸時代のはじめに上方から号令をかけても、各々の子孫はお互いに親戚付き合ひは続けていました。

法律を型どおり解釈して、戸籍上は武士の家の養女にして農家や商家の女性が侍のところに嫁ぐこともあったようですが、そういうことはむしろ例外的ではなかったかと思ひます。

幕藩体制が確立して来たら身分制度も広く受け入れられたかというところ、そうではなくて、逆にさらに崩れて行きました。貨幣経済が浸透して、身分もお金で売買するようになっていったからです。

系図調査をしていると、「もと士族」ということを誇らしげに云う年寄が居られたり、明治の頃の碑文に「士族」という文字が刻まれているのを見ますが、これは明治政府の教育の名残です。

うちは「士族」だからそんな家との縁組みはありませんと云う人に出会って、その歴史認識の貧弱さに呆れることがあります。

名主（庄屋）

兵農分離が行われる以前の戦国時代の村々では、有力者を中心に刀を持って皆で力を合わせて自分たちの土地を守っていました。こういう、殆どドングリの背比べの有力者の中から、少しずつ力を蓄えて近隣の村々、近郷、

更には近国へと影響力を拡げていったものが戦国大名です。

江戸時代の大名の中には、平安時代以来の歴史がある家もいくつかありますが、多くはその先祖が明らかでないことが多いのです。下剋上というのを歴史で習いますが、長い年月の間には実際のところ何が起きているのかは判りません。何度も繰り返される戦いに生き残って大きくなる家もあれば、攻め滅ぼされた家もありました。経済力と武力は違う、昔と今では人の考え方が違うと云われるかも知れませんが、百年（ほぼ三代）経てば栄枯盛衰が如実に観察できますので、意外に、中世に身分の低かった人々が近世になって社会の中枢で活躍していたという可能性も否定できませんし、その逆もあり得ると思います。

戦国時代に村の有力者で、いったん戦になれば、ちよつとした大部隊に号令をかけるような武将も江戸時代に入ると、或る者は大名家に就職して武士となったり、農家となったり、商家となったりです。

大名家に就職した者は、自分の屋敷を与えられる位で、特別に土地を与えられてはいません。与えられるのは給料のみです。もともと持っていた広い土地を手放してまで、就職する人はいないですから、戦国時代以降、大名家に武士（職業軍人）として就職した人は次男坊以下の、先祖から譲り受けた資産を持たない人だったろうと思います。

領地内の人民をうまくまとめるには、それに役立つような人間を利用しない手はありません。戦国時代から有力者として村を指揮してきた小隊、大隊の長は名主（庄屋）として領主に利用されるようになります。ですから、

江戸時代の名主（庄屋）など村役人を勤めた家は、その先祖は大名家と変わらない、或いはそれ以上の有力者であつたものもあり、「武士などに決してひけはとらない」という自信を持って江戸時代以降も生き抜いていました。

小山田の伝説

姫切り（嫁落し）伝説

山田の西方に瓢箪池（地図参照）の水と鎌谷川の合流場所があり、その下には堰がある。その堰は深く掘られていて、栓を抜くと一気に水が流れ出し大変危険な所であると現在の人達も語る。

いつの頃かは不明であるが、田へ早急に水を流す必要があつたとき、村の男達はその危険さに誰も行く者はなかつた。しかし、とある農家の若嫁さんが決死の覚悟でその栓を抜きに行ったという伝説である。「姫切り」「嫁落し」は勇気ある一人の女性の伝説が、時代を経て違った呼び方で伝わつたものだと思われる。

荒神山の抗争伝説

慶応二年（一八六六）東海道を名古屋まで収めた清水一家が伊勢路制圧に着手したのが、荒神山の抗争である。次郎長一家は神戸の長吉と穴太の徳との縄張り争いがあつたこの土地に入り、長吉側に味方し、大政（山本政五

郎ひさが率ひきいる戦闘集団せんとうしゅうだんと、甲斐かい信濃しなの制圧せいあつに転戦てんせんする大瀬おおせの半五郎はんごろうの別働隊べつどうたいを三河みかわの寺津てらつで合流ごうりゅうさせて、吉良きらの仁に吉きちを大将さうにして荒神山こうじんやまへ攻め入った。しかし吉良きらの仁吉にきちは荒神山こうじんやまで討ち死にした。

この時の事であるが、負傷ふしょうした大政おおまさ（山本政五郎やまもとまさごろう）や大瀬おおせの半五郎はんごろうや吉良きらの仁吉にきちの子分達こぶんたちが荒神山こうじんやまから逃げ帰る途中、山田の河原でばたばたと倒れ込んだそうである。その場で死に絶えた子分達もいたという。

息も絶え絶えに帰り着いた子分達は、その後、仲間の死を弔うために懐ふところに収められる大ききの石を清水から持ち運び八幡山はちまんやまに並べたという。

矢田監物の伝説

織田おだ信長のぶながの北勢攻めほくせい（一五六八年）のとき、矢田やだ監物けんもつは村を守るために「館やかた」（地図参照）から馬にまたがり、現在の公会所こうかいしよを通り山の東の道からの八幡山はちまんやまへとかけあがり陣じんをなしたという。そして矢田やだびろ（地図参照）から家来けらいを引きつれ出陣しゅつじんして行つたと聞く。また古老ころうの話によると、「監物けんもつの館やかた」のことを別名べつめい「姫屋敷ひめやしき」ともいう。それは監物けんもつがほとんど日々を戦いくさいに明け暮れて過へごし、監物けんもつの妻つまが屋敷やしきを守っていたことに由来ゆらいする伝説でんせつであろう。「館やかた」の西跡地にしあとちには一基さきの五輪ごりんの塔とうと五基ごきの石塚いしづかとへーべの木（へぼがや）があつたそうである。それらは監物けんもつの妻つまの塚つかであつたと聞く。

「きつね火」伝説

山田東に住居をかまえる古老の話であるが、「若いころ自宅の南側の窓から五百メートルほど南の丘陵（字名大玄〔地図参照〕付近）を見ると、火の玉がポーツポーツとあちらこちらに飛び火して見えた」と話される。

「きつね火」とは沼沢や墓地などで、雨が降った夜や、闇の夜などに燃えて浮遊する青白い燐光。鬼火とも言う。動物の死体の中のリンが燃えてできる火の玉のことである。

「さかさま」伝説

山田町の北側に足見川が流れている。農地改良により現在はゆるやかな曲線を描きながら流れているが、以前はもっと蛇行し今とは違った流れだった。その川上の部分に東に向かう下りの流れが、すぐさま西向きの流れとなって想像を絶するほど蛇行（地図参照）している場所がある。そのことを村人は「さかさま」と言っていたそうである。

「首切り場」伝説

戦国時代末期に丹波出身で室町幕府十二代將軍足利義晴に仕えた矢田監物という武將がいた。主君の死後放浪

の後小山田に住居し、八幡山に社を構えて小山田を戦乱、略奪から守ったと聞く。

監物の住まいである「館」(地図参照)のかたわらに小高い土盛りがあり、当時の「首切り場」であったと聞く。何の目的で、誰を切ったかは不明であるが話は今に伝わっている。

「夜泣きの井戸」伝説

現在の小山田農協のある地(地図参照)は昔小高い山(愛宕山)であった。その山上には高台にもかかわらず、涸れることのない小さな池があったと聞く。その傍らには祠が建ち、夜泣きをする子をおぶってお参りをすると、その子は「夜泣き」をしなくなったという伝説がある。場所が変わっているがその祠は今でも大切に守られている。

「お伊勢参り」伝説

江戸時代から明治時代にかけて、一生に一度はお伊勢参りをするのが夢であると言う時代であった。当村においても然りで、預貯金をしてお伊勢参りに出かけたそうである。その折、山田の村人達は、現在太陽化学の南を流れる内部川まで見送りに出たそうである。その当時今の鹿間橋はなく川に飛び石が並べてあったと聞く。数日後「お伊勢みやげ」を楽しみにして、村人達はまた内部川まで出迎えに行ったと聞く。

直接小山田に伝わる話ではないが、江戸時代村には若衆という十五歳以上の若い男性の組織があった。時折若

衆連中が寄り合ってお伊勢参りを計画した。鉄道も自動車もなかった当時、出かけるのには数日かかった。勿論金銭的にも、時間的にも余裕のある若者が集まった。決まって出てくる話題の中心は、年頃の娘さんをどのようにして誘うかであった。特に、深窓に育つ良家の娘さんを連れ出すことは難しい事であった。婚期が今と違って二十歳以下、十六、七歳頃であった上、結婚は殆ど親同士の話し合いで決まっていたので、結婚前の娘さんが若い男性群と一緒に旅をすることなど、考えられないことであつたはずである。当然、玄関から正面切つて誘う事など不可能であつた。若衆達はあの手この手と知恵を絞らなければならなかつたと言うことである。出発の朝、まだ暗いうちに、目当ての娘さんが旅支度をし、こつそりと家を抜け出してお伊勢参りの一行に加わつた。一生に一度はお伊勢参りと言われた旅であつたから許されたのであろうか、或いは未婚の男女の交際、若い娘の社会経験などに対する知恵であつたのであろうか。娘さんが抜け出しても、お伊勢参りに出かけたと判れば両親は後を追わせたりして騒ぐことはなかつた。一兩日すると、若衆の代表と娘さんからの手紙が届けられ、お伊勢参りの日程が詳しく知らされた。両親は娘の帰りを指折り数えて待つだけであつた。お伊勢参りを済ませた一行が帰村する日、両親は村外れの並木道まで出かけて娘達一行を迎えた。手を取りあい、涙を流しながら、心なしか大人びてしっかりした娘の無事を喜び、同行した若衆や代表に心付けをし、お礼を言つたということである。

坂上田村丸に関して

これは直接小山田に伝わる伝説ではないが、蝦夷地征伐で名高い坂上田村丸は810年～823年に伊勢の国司としてこの地に赴任した。その時の鈴鹿征伐の状況を語る武勇伝が能『田村』の中に出てくる。

鈴鹿山 五流廢絶曲 宣旨により坂上田村丸(ワキ・征夷大將軍坂上田村麻呂のこと)が勢州(伊勢)の鈴鹿山

に住む赤頭の四郎將軍という鬼神(シテ)を退治に行く。鈴鹿山につくと一人の美人が居るので名前を尋ねて鬼

神の居場所を聞く。女性には鈴鹿姫といい、「鬼神は奥州安達ヶ原に行っているので、明け方にならないと帰って

こない」という。そして鈴鹿姫は「鬼神を討つなら、私(鈴鹿姫)も怨む子細が有るので手助けします」と田村

丸に征伐をお願いし、夜の明けるのを待った。

鬼神赤頭の四郎將軍は安達ヶ原からの客人を招いて崇め酒宴を開く。酒宴の最中、鬼神は鈴鹿姫が居ないので

心配になる。舞姫二人登場し「羽の舞」を舞う(相舞いが見所の一つ)。舞いが終わると坂上田村丸と従者二人

(これが軍勢をあらわす)が登場し斬り合いになる。軍勢は鬼神に圧倒され退散する、坂上田村丸が登場し鬼

神と一騎打ちになるが勝負がつかない。そこに鈴鹿姫が赤いタスキをして登場(黒川能独特の着付け、タスキ

は労働していることを表現するきまり)して鬼神に助太刀をすると見せかけ、鬼神に討ってかかる。優勢だった

鬼神は鉞で応戦するが、だんだん力つきて、坂上田村丸と鈴鹿姫により討たれてしまう。(黒川能王祇祭記録)

坂上田村麻呂を祀った神社が全国各地にある。その中のひとつでもある甲賀市土山町にある田村神社では、鈴鹿峠の鬼を退治したという伝説にちなんで始まったといわれる「厄除祭」が毎年行われている。現在の山田町内でも「田村詣り」といって破魔矢を受けてこられる方がいると聞く。

あとがき

小山田の歴史年表の作成を終え私自身まったく予想だになかった細部にわたる事柄が明らかとなった。驚きでいっぱいである。作成にあたっては多くの方からアドバイスをいただき、個々にお持ちのたくさんの方の充実した資料を提供していただき、大いに参考になった事に感謝している。

また先人達がいかに後代の人達へ、自分たちの小山田の歴史を伝えたいという気持ちが篤かったかとか考えようがない。それをまた私が末代へ伝える巡り合わせになったということは何かの因縁としか思いようがない。

小山田の歴史を振り返ってみると、まず大きく区分すると0年から500年までを「神森（かふもり）の時代」、500年から1000年までを「西の宮、開墾の時代」、1000年から1500年までを「東の宮、神領の時代」、1500年から1600年までを「矢田監物と動乱の時代」、1600年から「幕藩体制と安定の時代」、1900年～「開国の時代」に大別できると思う。

もし「加富大明神記」が真実を伝えているとすれば、おおよそ一五〇〇年間におよぶ村の歴史を物語っていた

のである。そのことに気付いたとき謎のなぞような文章ぶんしやうであった「加富大明神記」が紐ひもを解とくように理解りかいができるようになった。地名ちめいと場所ばしよの関係かんけい、名称めいしやうの意味いみとその内容ないようの関係かんけいが推測すいそくできるようになった。

また、小山田おやまだの大きな転換期てんかんきは1551年の矢田監物の来村らいそんであると思う。すなわち、小山田おやまだの村内そんないにおける血脈けつみやくが矢田監物来村以前やだけんもつらいそんいぜんとそれ以降いこうとは大きく変化へんかしたと思われる。

西暦せいれき500年頃ねんごろから奈良なら、京都きやうと、近江おうみとの交流かうりゆうもあることから、百パーセントとは言い切れないが、監物来村けんもつらいそん以前の小山田いぜんおやまだは村内そんないだけの血脈けつみやくであっただろうが、監物の登場とうじやうによってはじめて外来多種がいらいたしゆ（監物けんもつの家来けらいは全国各地方ちほうから集あつまった人達ひとたちであったと思う）の血脈けつみやくが入はいってきたと思われる。そしてその後江戸時代ごえどじだいに入り平尾家系ひらおかけいが庄屋しやうやとなつていったということは、監物けんもつおよびその家臣かしんの子孫達しそんたちが山田村やまだむらの牽引役けんいんやくをなしていったと充分じゆうぶんに考えられる。現在山田町げんざいやまだちやうの約三割やくさんわりが「矢田」やだ姓せいである。村内そんないにおいては江戸時代えどじだいから姓せいは受け継つがれてきたということから察さつすると、直系ちよつけいであるかどうかの結論けつろんは出せないが、矢田監物やだけんもつは小山田おやまだにおける大きな転換期てんかんきをつくりだしたキーマンであつたと言えるであらう。

「万松院殿尊儀」ばんしやういんでんそんぎと刻きざまれた一基いっきの墓はかに疑問ぎもんを感じかん、拓本たくほんを取とつたのがきっかけとなり、小山田おやまだの歴史探訪れきしたんぱうという壮大なるロマンへと展開てんかいしていった。小山田おやまだの歴史れきしの深さふかと魅力みりよくは歴史年表作成れきしねんびやうさくせいの情熱じやうねつをかきたて一氣いっきに仕上あがりまでたどりついた。

矢田監物の魅力とロマンに取りつかれ、監物で締めくくった小山田歴史探訪の旅のページをこのへんで閉じた
と思う。

年表作成に当たったの注意事項

- 一、出典資料により年代のくいちがいがあるがその資料のまま記載した。
- 二、出典資料により同事項重複部分があるがそのまま記載した。

平成十八年 七月

瑞雲山安性寺 第十八世 香樹院宜秀

竹内宜秀 著